

三輪山を しかも隠すか

雲だにも 情あらなむ 隠さふべしや 額田王(巻一・一八)

きれいな三角すいの形をした三輪山は、古くから信仰の対象となり、今も山そのものがご神体として祭られています。この歌は、その象徴的な三輪山が見えなくなる場所に移動する際に、額田王が別れを惜しんで詠んだといわれます。

一方で、近江遷都の時の天皇の歌だとの記

録もあると注が付されています。日本書紀曰く、遷都の年月日があり、引用されています。ただし、「六年丁卯」とあるべきところが「六年丙寅」となっており、現存する「日本書紀」の記事と異なる点が注目されます。

「万葉集」には、「日本紀」や「紀」から引用したとみられる記述

やまと
万葉がたり

を含む注が十七例ありますが、「日本書紀」と記されたのは六番歌の注とこの歌の注の二例だけです。797(延暦16)年に成立した「続日本紀」の巻第八の巻老4年5月癸酉条に、「舍人親王、詔を奉けたまはりて日本紀を修む」とあることから「日本紀」という名称も通用していたように

ですが、古い写本などから、「日本書紀」が正式名称であったと考えられています。今年「日本書紀」が編さんされて1300年の節目の年です。養老4年5月21日(ユリウス暦720年7月1日)に完成したときの時代に国中にまん延

した疫病は祟りであり三輪山の神を祭ることでも鎮めたとあります。未知のものへの恐怖は人間の根源的な感情であり、古代の人々は疫病を祟りと捉えることで乗り越えようとしたようです。現代の私たちは、科学的な知識に基づき感染症を正しく恐れ、乗り越えることができると思っています。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回17日

【訳】三輪山をこのように隠すのか。せめて雲だけでも心あってほしいものを。隠すべきではない。

大船に 真楫繁貫き

この吾子を 韓国へ遣る

齋へ神たち

光明皇后(巻十九・四二四〇)

「万葉集」の題詞によくと、この歌は春日で神を祭った日に光明皇太后が作り、遣唐使の藤原清河に下されたとされます。清河は藤原房前の子で、750(天平勝宝2)年に第一二次遣唐使の大使に任命され、752年に唐の都長安に入りました。この頃、光明の夫である聖武は退位して太上天皇、光明は皇太后でした。房前と

光明は兄妹で、清河は光明の甥に当たります。多難な航海へと出発する「吾が子」に等しい甥の行路安全を神に祈った歌です。

ところで、ここで言う春日の神とは、現在の春日大社を指すと一般には考えられてきました。しかし、これには再考の余地があります。遣唐使が出発前に神祭りを行ったことは史書の「続日本紀」

やまと
万葉がたり

に数例の記録が残っており、717(霊龜3)年に第九次遣唐使が行った祭りの場所は「蓋山の南」でした。蓋山とは現在は禁足地となっている御蓋山のことです。遣唐留学生としてこの年に渡唐した阿倍仲麻呂の歌「あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」(「古

今和歌集」巻九一四〇六番歌)にもあるように、遣唐使一行にとって記憶に深く刻まれた山でした。しかし、春日大社は御蓋山の西麓に立地し、東大寺正倉院にある奈良時代の地図にも同じ位置で描かれていますので、遣

唐使が神祭りを行った「蓋山の南」は、西麓の春日大社とは別の場所であるはず。歌の題詞は、神祭りの場所を「春日」と明記します。奈良時代から平安時代前期頃の史料によると、春日とい

【訳】大船に左右の楫を一面に通して、この子を唐へ遣わす。祝福を与えよ。神々たちよ。

分布しています。この一帯には、春日離宮、春日酒殿、春日齋宮、春日寺などの春日の名を冠する皇室関係の施設が集中し、県立高円高校の場所で行われた発掘調査では、春日酒殿跡と推定される地下遺構も見つかっています。遣唐使を加護した春日の神は、この辺りで祭られたと想定できるでしょう。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

次回(7月1日)